

第六部
資料

一、人物

各界で活躍した人々

8	7	6	5	4	3	2	1
田尻昌次	長沢一夫	長沢忠	北村秀一	北村徐雲	中島梅岳	谷垣平一郎	河本濱二郎
陸軍中將	代表の実業家	河川土木技師	農業試験場長	陸軍軍医	日本画家	勤皇家	気多郡大郷長

15	14	13	12	11	10	9
植村直巳	瀬崎晴夫	井東勇	西岡時雄	谷垣長蔵	小林篤一	友田二郎
冒険家	北欧風景画家	村医	放射線医学会会長	有明海干拓者	北海道信連会長	外交官



1 河本濱二郎

(二八四二—一九二〇)

明治維新以後の
気多郡の政界を
代表した大御所

天保十三年(一八四二)十一月二十五日、伊福村(現在

鶴岡地区)庄屋河本太郎右衛門の次男として生れた。幼名を弥蔵といい、後に濱三郎と改名した。河本氏は羽柴秀吉の但馬征伐に際し、水生山城前面の善応寺野の戦に奮戦して功名をあげた豪勇の武士、河本新八郎の子孫である。

明治二年(一八六九)、久美浜県より気多郡三九カ村大



2 谷垣平一郎

(一八三九—一九一八)

田中河内介の後
継者となった隠
れた勤王家

天保十年(一八三九)四月二十二日、知見村(三方地区)

庄屋を拜命。年二六歳。翌明治三年、東気多郡大郷長となる。

明治四年(一八七二)十一月、豊岡県が発足したが、翌五年六月より、気多郡区長、ついで明治七年五月より、但馬国第三大区(気多郡)区長を命ぜられている。

明治十二年(一八七九)十一月、気多郡選出兵庫県議員に当選、明治二十二年(一八八九)町村制が実施されるまでの間に県会議員を五期勤めた。

その他数々の役職は枚挙にいとまがない。

明治維新の変革期にあたり、気多郡行政の責任者としてよくその任務を全うし、蓼川新大井堰の完成、殖産興業の指導奨励に大きな足跡を残している。

大正九年(一九二〇)三月二十八日、死去。七七歳。

の庄屋、与左衛門利徳の長子として生れ、後に与左衛門を襲名した。

嘉永五年(一八五二)八月、中山忠能卿の家臣となっていた勤王家田中河内介(豊岡市香住出身)を慕って京都に上り、これに師事したが、河内介の深い信頼を得、以後中山邸への出入りも許され、勤王志士とも交り結び、河内介の隠れた後継者となった。

明治天皇は中山忠能卿の第二女慶子の方の子として嘉永

五年九月二十二日に中山邸で誕生され、中山邸内に新築された親王御殿（祐宮陸仁親王と称す）で成長され、田中河内介が御養育係に当たっていたから、平一郎の勤王心は極めて強くその影響を受けたのである。

谷垣家には、中山忠愛卿から拝領した明治天皇御使用品とか、平一郎よりの献上品に対する礼状などが数多く保管

されている。

中山家は侯爵に列せられ、中山孝磨が貴族院議員となるが、平一郎は幾度となく建白書をその許に送り届け、忠君愛国の至誠を披歴してやまなかったという。

大正七年（一九一八）六月十六日死去。八〇歳。

小西蘆汀に従って円山派の画風を学び、また市川千山について学んだ。

明治の初年に九州に遊び、画家陸舟、柳橋、春江、瓊渚、あるいは、書家松園、日南等と交わり、再遊して、五岳、秋谷、拜山、梅仙等とも交わっている。

また、東都において、松園、環翠、老山、晴湖、晴蘭等と交友があり、彩管を携えて全国を周遊し、大いに画業を研究するところがあったという。

明治十七年、第二回絵画共進会に出品して賞状を得、以後著名な展覧会にしばしば作品を出品して、金銀銅牌や賞状を多数受けている。

梅岳が特に得意としたものは牡丹で、蝶や蟹などもこれを得意とした。

老年には西気村栗栖野に居住し、絵画三昧の日を送り、多彩な画を残し、昭和六年（一九三一）二月八日、死去し



中島梅岳筆山水画

3 中島梅岳（一八四六—一九三一）

神鍋出身の高名な日本画家

弘化三年（一八四六）十一月十日、東河内村（西気地区）の農家、中島宇八の三男として生れた。後に梅岳、又は椈岳とも号した。

幼少のころから絵画を好み、慶応元年（一八六五）より

た。八四歳。栗栖野にはその記念碑が建てられている。



4 北村 徐雲
(二八六〇—一九二一)

日清・日露の役
の野戦医療に偉
功赫々たる陸軍
一等軍医正

万延元年（一八六〇）六月十九日、日置村の庄屋北村惣兵衛（長蔵）の長男として生れた。幼名は喜代蔵、後に蔵六庵と号した。

幼時より学を好み、大志を抱き、長じて後、東京に遊学、桜井勉ら但馬出身先輩に愛され、大学予備門を経て東京医科大学を卒業し、明治二十年（一八八七）医学士となり、宮城県立医学学校、福島県立病院に勤務した後、釜山病院長に招かれ渡韓、在留日本人と現地人の医療、衛生に献身的に従事した。当時わが国内における医学士の数は極めて少なく、海外に出るものは皆無と云ってよい状態であったので、その懇篤親切な医療に接した韓国人士は、その医徳を仰慕し、その声名は韓国全道に喧伝されたといわれている。

明治二十六年七月、陸軍二等軍医に任ぜられ、陸軍衛生部に出仕したが、二十七年、日清戦争が起るや第一師団の野戦病院付となり、清国に出征して各地の戦場の医療に従事した。二十八年十二月に帰国し、陸軍一等軍医に進んだが、更に三十七年、日露戦争の勃発に当り、第一師団野戦病院長として大陸に転戦、ついで第三軍兵站監部附・大連病院長となり、八月十五日より開始された旅順口要塞の総攻撃の負傷将士の大連病院に後送される者が連日三〜四〇〇名を下らぬ惨状となり、最高時には、七〇〇〇名を収容するに至ったが、精力絶倫、率先垂範して指揮監督し、その処理を全うし、人びとを驚嘆させた。同年十月、第四軍兵站病院長となり、三十九年二月帰国、戦功により功四級金鷄勲章、勲三等瑞宝章を授与されている。

その後、私費をもってドイツに留学すること一年三月、明治四十年十月帰国するや、熊本・第六師団軍医部長となり、四十一年十月、師団に従って韓国に渡った。あたかも四十二年八月より十月にわたり、京城・龍山に劇烈なコレラが発生し、患者一九〇〇余人中死者一二〇〇余人に及んだが、その適切で徹底的な予防処置により、兵営内には一人の患者も出さなかったという。四十三年四月、師団

は任務を終えて熊本に帰還したが、四十四年度全国各師団
中で最優等の衛生成績をおさめるなど、抜群の手腕を發揮
している。



5 北村 秀一

(二八八九—一九四五)
沖繩戦局の犠牲
に散った農事試
験場長

北村徐雲の嗣子、秀一は、明治二十二年(二八八九)一
月六日に生れた。東京帝国大学農学部卒業、農芸化学を専
攻し、各地の農事試験場で農芸化学、農事改良の研究と実
践に従事し、農村の振興に努力を傾注し、進んで沖繩県農



6 長澤 忠

(二八七四—一九〇三)
若くして病魔に
倒れた秀才の河
川土木技師

不幸にして明治四十四年(一九一七)十二月十九日、急
逝した。享年五一歳。陸軍一等軍医正。

事試験場長として沖繩に赴任して、農事並に製糖業の研究
発展に寄与貢献すること多大のものがあつた。昭和二十年
(一九四五)四月二十五日、アメリカ軍の沖繩来襲に際し
玉碎、戦死を遂げたが、当時わが国の農業界の大御所であ
つた石黒忠篤は、その弔辞の中で「男子死所を得るに苦し
む。君死所を得たり。以て冥すべし。運なる哉。命なる
哉。」とのべてその死を悼んでいる。悲しむべき、憎むべ
き戦争の犠牲者として、深くその材幹が惜しまれる。享年
五六歳。

北村秀一の長男、和夫は一高、東大卒。医学博士。現在
順天堂大学教授で、心臓医学の世界的権威である。

府中新村の庄屋、大地主、七代目長沢実二郎の長男とし
て、明治七年(一八七四)二月十九日に生れた。長ずるに
及び東京帝国大学工学部に学び、特待生となり、明治二十
八年、二二歳の若さで、抜群の成績で卒業し、工学士とな
り、直ちに内務省に入り、第五区土木監督署技手に任ぜら
れ、神戸港修築の設計に当つたが、明治二十九年より二カ

人物

一年間、欧米各国に出張、河川工事新工法を研究視察して帰国、明治三十三年四月には「淀川改良第三工区事務所初代所長」に任ぜられた。この工事は、淀川改修工事の中で最難所といわれた瀬田川改良工事の設計、施工を担当するのであったが、長沢忠は自から視察した英、独、仏、等、等の最新の土木機械を輸入し、ドレンジャー（掘削機械）、しゅんせつ船、軌道、機関車などを現場工事に応用、率先指



7 長澤 一夫
(一八八二—一九六五)

代表的実業家と
なった文学青年

明治十五年（一八八二）十月二十日、国府村府中新、長沢実二郎の三男に生れた。明治二十九年（一八九六）豊岡中学に先んじ創立された姫路中学に一期生として入学、級友魚住影雄と親交を結んだが、六高を経て東京帝国大学法科大学を卒業、三井鉱山に入社し、調査部長、労働部長などを歴任、東洋高庄の専務取締役転じ、戦後は大日本水素の社長に就任、実業界で活躍した。

揮監督に当たっている。瀬田の唐橋の量水塔内の自記ドラマはその備付にかかるもので現在も使用されているという。
明治三十六年（一九〇三）六月、下顎部に肉腫を生じ、治療の甲斐なく、十一月三十日死去した。二九歳。
大津市市上黒津町、早瀬嘉平家庭園の西側に、「瀬田川洗堰初代所長、長沢忠追悼碑」が建てられている。

昭和四十年（一九六五）十月二十五日死去。八三歳。
長沢一夫は若くして文学を好み、明治三十六年（一九〇三）より明治四十年（一九〇七）まで、同人誌「無絃」を創刊、みづから無絃子と号してこれを主宰し、通巻六五巻に及んだ。その同人には、河本修三、依田定尾、河本重利、長沢薫、宿南昌吉、同八重、森本豊次郎、福田徹夫、平岩豊、大部孫大夫らの名前があり、安倍能成、阿部次郎らも友人として寄稿しているが、「無絃」は明治後期における但馬地方を代表する文学同人誌として貴重な意義を有している。一夫の遺稿に「一翁」のペンネームの「一翁習作帖」があり、明治三十七年から明治四十年までの期間の文学作品五編が収められているが、その高い文学的才能を窺うことができる。



8 田尻 昌次

(一八八三—一九六九)

日本陸軍の船舶
輸送を指揮した
陸軍中將

明治十六年(一八八三)十月二十八日、浅倉(旧養父郡宿南村、現日高地区)に生れた。長ずるに及び一旦京都第三高等学校に入学したが、家運衰退のため学業半ばで帰郷し、江原小学校の代用教員などをして家計を支えた。

明治三十七年、日露戦争起り、徴兵検査に際し甲種合格、軍人を志望して陸軍士官学校に入学し、卒業後陸軍少尉に任官、福知山歩兵第二〇聯隊の聯隊旗手として軍歴の第一歩を踏み出した。その後、満洲守備、大隊副官、東京中央幼年学校付を経て、大正四年より三年間陸軍大学校に学び、以後、広島宇品陸軍運輸部付、参謀本部付船舶班長、陸軍大学校教官を歴任、昭和五年には欧州諸国に出張

視察、帰国後はおっぱら陸軍運輸部に奉職し、日本陸軍の輸送作戦の中樞を企画、指導することとなった。

昭和六年、満洲事変が勃発し、日中戦争から太平洋戦争へと時局が進んだが、その間、しばしば朝鮮、満洲、北支、中支、南支等に出征、昭和十三年、陸軍中將に昇進、船舶輸送指揮官となって全軍の海上輸送を掌握し、重責を果し、功三級金鷄勲章、勲一等旭日大綬章を授与されている。

昭和十五年退官、東亜海運株式会社顧問となり、ついで昭和十七年、天津に北支船舶株式会社を創設し、社長に就任したが、敗戦後昭和二十一年四月、内地に引揚げ、一旦追放の身となり、郷里で晴耕雨読の生活六年、昭和二十八年よりは、防衛庁の依頼を受け、わが国の軍事海運の回顧録一〇巻(約二〇〇〇頁)を編集した。なお佐官時代の著書に「元寇」がある。

昭和四十四年(一九六九)六月二十四日死去。享年八五歳。



9 友田 二郎
(二八九一—一九六九)

外国使節接伴儀
礼の権威の外交
官

友田二郎は友田一郎の弟で、明治二十四年(一八九一)九月十日、江原の友田俊蔵の次男として生れた。豊岡中学(第一〇期生)、東京外語を卒業、フランス語に長じた。大正四年(一九一五)外務省に入省後、第一次世界大戦後のヴェルサイユ講和会議に随員として出席したほか、在仏一



10 小林 篤一
(二八九〇—一九七二)

北海道信用組合
連合会(北連)の
創設者、育成者

明治二十三年(一八九〇)十一月五日、知見(三万地区)の生れ。明治三十年母と共に北海道に移り、前年に渡道し

〇余年、マルセイユ、リヨン領事などを歴任、また吉田茂の信任が篤く、ロンドン大使館在勤後、外務大臣秘書官も勤めた。

外務省きつての外国使節の接伴、儀礼に関する権威とされ、外務省研修所の教官や、宮内省式部官も勤め、温顔篤実、謹厳重厚な代表的外交官であった。

昭和四十四年(一九六九)二月五日死去。享年七七歳。正五位勲三等瑞宝章を贈られている。

その「プロトコル(外交儀礼)」に関する著述として、改版を重ねた名著「国際儀礼とエチケット」(昭和五七年、学生社刊)(旧題「エチケットとプロトコル」昭和三九年)がある。

た父ともども、北海道日高の狹伏村、空知の幌向村、美唄町峰延、原野など転々と移住しつつ成人した。大正三年峰延産業組合を発起人となって設立、大正八年組合長となり、同年北海道信用購買販売組合連合会(略称「北連」)を発起人となって設立、専務理事、副会長、を経て昭和十一年に第九代会長となった。

第二次世界大戦後、農業協同組合が発足するや、引続いてリーダーとして活躍、昭和三十七年、北海道地方区より参議院議員に当選、自由民主党に所属、昭和四十二年北海

道開発政務次官となっている。昭和四十七年（一九七二）十一月二十三日死去。享年八二歳。勲二等瑞宝章を授与さ



11 谷垣 長蔵
(一八八〇—一九六七)

九州有明海干拓
事業に成功した
功労者

明治十三年（一八八〇）十月十三日、浅倉（旧養父郡宿南村）に生れた。宿南小学校、府中小学校高等科を卒業後、一時八鹿警察署に勤務、明治二十九年上京して但馬出身の著名な実業家原六郎邸に寄寓し専修学校理財科を卒業した。明治三十四年、原鉱業部経営の福岡県田川郡川崎村の大任炭鉱に勤務、続いて原鉱業筑後鉱山に勤務した。
明治四十四年十一月、福岡県八女郡北川内村で、地方有志を糾合して筑後水力電気株式会社を創立、明治天皇が筑後平野で大演習を統監されるのに間に合わせ、六〇〇〇戸に点灯、開業して地方開発に大きく貢献した。

れたほか、北海道文化賞、北海道開発功労章なども受けている。

明治四十五年より、有明海の干拓事業に取組み、福岡県山門郡大和町の矢田川右岸約六〇町歩の干拓事業に着手し、大正五年これを完成、これ以後自信を得て、有明海の干拓事業を終生の事業と定め、不退転の信念でこれに没頭した。

干拓計画面積は約五〇〇町歩、主要堤防潮受にコンクリート製円管を並列する工法を案出実施し、漸く昭和八年、民有地総面積一四七町六反一七歩が完成下げ渡しとなり、「大和村大字谷垣」と行政地名が命名されている。この谷垣開の干拓地は、太平洋戦争末期に食糧増産対策のため、自作農創設事業として二三八世帯に全耕地・施設を解放渡し、昭和二十年五月に完了している。戦後の農地解放にさきがけた、独自の日本的農業振興事業であった。谷垣自作農組合は、谷垣長蔵翁頌徳碑を建立してその遺徳を偲び、谷垣開干拓の記録映画を残している。

昭和四十二年（一九六七）五月一日死去。享年八六歳。



12 西岡 時雄
(一八九三—一九八一)

我国の放射線医学の先駆的権威

明治二十六年(一八九三)十月二十九日、久斗村の医師、熊雄の長男として生れた。祖父耕三も医師で日高村長を勤めた。幼にして母、父、祖父を相次いで亡い、洲本の叔父牧太に引取られ、洲本高等小学校、洲本中学に学んだが、牧太の急死により豊岡の叔父泰三に引取られ豊岡中学二年に転校(第一二期生)、卒業後大阪医科大学に学び、大正十年(一九二一)卒業、大阪大学医学部副手、講師を経て教授、レントゲン科医長となり、早くからわが国にお



13 井東 勇
(一八九一—一九七六)

「医は仁術なり」を生涯実践垂範した名村医

ける医学放射線とガン治療に取組み、左足は放射線障害のため切斷し義足となったが、斯界の先駆的な権威者として知られた。

昭和二十七年(一九五二)日本医学放射線学会会長、大阪大学医学部附属診療エックス線技術学校初代校長となり、昭和三十二年(一九五七)国立呉病院初代院長に転じ、中国地方ガンセンターを設立し、医療福祉向上に多大の貢献をなし、昭和四十二年(一九六七)退官した。かねてより郷里の人々の需めに快く応じ多数の患者の人命を救い、その恩に感ずる者が謝恩会を結成し敬慕の跡を絶たなかったが晩年は吹田市に居住し、医療指導の日を送った。

昭和五十六年(一九八一)六月十五日死去。八七歳。従三位、勲二等旭日重光章授与。医学博士。呉国立病院正面玄関脇には胸像が立ち、在りし日の温容を伝えている。

明治二十四年(一八九二)四月十五日、八代村八代に生れた。井東家は代々医をもって業とし、元龍を襲名していたが、祖父元龍は勤皇の志士として有名な田中河内介の実弟で、豊岡市香住の小森家から養子に來た人である。

勇は豊岡中学(第一二期生)、金沢医学専門学校に学び、大正七年から、八代、奈佐両村民に乞われて帰村し「井東

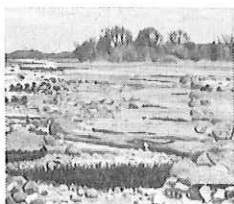
仙境医院」を開業した。性温厚で、慈愛深く、「ほとけ」のようだと崇敬され、数々の逸話が残っている。

葉代は請求したことがなく、持って行けば受け、払えない人はそのままとなった。盆と正月に米一升持ってあいさつに行くのが村民のならわしで、婦人会が奉仕的に盆前、正月前に葉代を集めたという。年中無休、昼夜をわかつず病人があれば診療に当たったが、老年には体力の限界のため、「私を困らせないで下さい」と貼り紙が出してあった。しかし来る者を拒むことはなかった。診察は、養生の注意を与えるのが主眼で、なるべく薬を服用させず、注射もほ

とんどせず、診断書料も最後まで一〇〇円で通した。

若年の頃、奈佐村にも一日おきに馬に乗って「かさのふた峠」を越して診療に通ったが、坂道で馬が苦しむと、叱らずに馬からおりてエンジンを与えて歩かせたという。

権勢におもねらず、地位や財産に目もくれない人であったため、収入は少なく家族の犠牲は大きかったが、村人に慕われ、生前の昭和四十四年四月に八代地区老人会を發起人として頌徳碑が建立されている。昭和五十一年（一九七六）七月十九日死去。享年八五歳。勲五等双光旭日章を授与されている。



瀬崎晴夫筆風景画

14 瀬崎 晴夫

（一九〇七—一九七七）

パリで学びスウェーデンに帰化した北歐風景画家

が斎藤与里に洋画を学び油絵をよく描くのに発奮し、大阪の小出楯重の画塾に通いはじめ、やがて本場のパリで絵の勉強をしようと決意、豊岡中学で二年以上級の安東寿雄、一年以上級の瀬崎徹らの親友の激励や協力もあり、資金カンパの個展を開くなどして渡欧資金を得、昭和三年（一九二八）単身パリに渡り、女教師マドモアゼル・ペリエを識り、彼女をパトロンとして画の勉強に励んだ。

明治四十年（一九〇七）九月十二日、日高村久田谷の農業瀬崎菊蔵の次男として生れた。豊岡中学（第二五期）から御影師範に進み、昭和二年（一九二七）芦屋の精道小学校教員となったが、その生徒の中の沢美代子、和子の姉妹

昭和十一年（一九三六）一時帰国し、当時一六歳で二二歳下の沢和子と結婚式をあげた後、相伴って再びパリに戻り画業に専念した。晴夫の交友は藤田嗣治、猪熊弦一郎、マリー・ローランサンの愛人で詩人のアンドレ・サルモン

と広がったが、個展を開いて成功を収め自信を深めた。一方和子も絵を藤田嗣治に学び、ローランサンに愛され師事し、サロンドートンヌに入選し、パリ・アンデパンダンに出品するなど、女流画家としての地位を得た。

やがて第二次世界大戦の進展に伴い、昭和十七年（一九四二）当時日本大使館海軍武官室に勤めて生計の資を支えていた和子にストックホルムへの転勤命令が出たため、二人は相伴ってスウェーデンに渡った。戦後和子は日本に強制送還されることとなり、昭和二十一年（一九四六）単身帰国したが、晴夫はストックホルムにとどまり永住を決



15 植村 直巳
(一九四二—現在)

人類史上前人未踏の数々の偉業に輝やく不世出の冒険家

昭和十六年（一九四一）二月十二日、日高町上郷の農家に、父藤治郎・母梅の六人姉弟の末子として生れた。府中小学校、府中中学校、県立豊岡高校（第一期生）に学び、昭和三十五年四月上京、明治大学農学部に入學と同時に

意、スウェーデン国籍を得、ロイヤルアカデミー会員に加えられ、北欧画家としての生涯を送った。晩年には北欧を訪れた東山魁夷と共にスケッチをして歩いたのが最後の思い出となったという。

帰国した沢和子は昭和二十四年（一九四九）晴夫と離婚したが、その後も女流画家として活躍し、名声を勝ち得ている。晴夫は晩年はスウェーデン南部のチビックに住み、好んで風景画を描いたが、昭和五十二年（一九七七）八月二十八日、四〇年振りの帰国を前にして急逝した。年六九歳。

に体育会山岳部員となり、登山家としての訓練の第一歩を踏出した。大学卒業後の輝やかしい足跡の数々を年代順に簡単にたどってみよう。

昭和三十九年五月、移民船でアメリカに渡航、アルバイト生活後、十月にフランスに渡り、シャモニーでモルジヌのジャンピユアルネススキー場のアルバイト生活に従事。

昭和四十年二月～五月、明治大学山岳部のネパール・ヒマラヤのゴジュンバ・カン（七六四六メートル）遠征隊に参加、初登頂に成功（二四歳）。

昭和四十一年七月、アルプス・モンブラン（四八〇七メートル）、マッターホルン（四四七七メートル）登頂。十



北極点到達 (文芸春秋提供)

月、アフリカ大陸に渡り、ケニヤ(五二〇〇メートル)、キリマンジャロ(五八九五メートル)単独登頂に成功。

昭和四十三年二月、南米大陸に渡り、エル・プルタ(六五〇三メートル)に登頂後、アンデス山脈の最高峰アコンカグア(六九六〇メートル)の単独初登頂に成功、驚異的短時間登頂記録を樹立した(二七歳)。

同年四月～六月、ペルー・アンデスのふもとの村、ユリマグアスから、河口のブラジル・マカバまで、アマゾン河を六〇〇キロ、六〇日間かかって単独いかだ下りに成功。これ以後、「登山家」から「探険家」へと追究目標が飛躍的に拡大する。

昭和四十五年五月、日本山岳会エベレスト登山隊に参加、五月十一日、松浦隊員と共に日本人として最初の同峰(八八四八メートル)登頂に成功(二九歳)。

同年八月、北米大陸の最高峰、アラスカ・マッキンレー(六一九一メートル)の単独初登頂に成功。七日間の超スピード登山記録を作る。世界五大陸最高峰登頂達成。

同年十二月、山岳同志会とともに、アルプスのグランド・ジョラス北壁(四二〇八メートル)の冬期第三登に成功。

昭和四十六年二月、ノーマン・ディーレンファース隊長以下のエベレスト国際登山隊に日本代表として、小西政継、伊藤礼造とともに参加。南壁を八三五〇メートルまで登頂。

同年八月、日本列島を稚内から鹿児島まで徒歩で三〇〇〇キロを五二日間かけて縦断(一日平均踏破距離五八キロ弱)。

同年十月、南極大陸に渡り、現地視察。

昭和四十七年九月、地球上の人類の住む北限であるグリーンランド・シオラパルクに赴き、エスキモー部落に一〇カ月間滞在、ここで極地冒険を成功させるために心身ともに「極地人」に変身すべく体験を重ね、三〇〇〇キロの犬ぞり独り旅を体験する。

一、人物

昭和四十八年六月、公子夫人と結婚（三二歳）。

昭和四十九年十二月、グリーンランド南部のケケルタークから、一二頭の犬とともに単独犬ぞりで北極圏一万二〇〇〇キロ踏破の旅に出発、途中アンダーソンベイで越夏の後、一年半かかって、昭和五十一年五月、目的地・アラスカ・コツビニューに到着。

昭和五十二年三月～十二月、北極点、グリーンランド探険行のための準備と視察を重ねる。

昭和五十三年一月、北極点・グリーンランド縦断単独犬ぞり旅行に出発。同年五月、北極点到達。同年八月、グリーンランド単独犬ぞり縦断に成功（三七歳）。

昭和五十四年二月、ロンドンにおいて、世界でもっとも勇敢な人びとに与えられる「第五回国際スポーツ勇敢賞」を日本人として初めて受賞した（三八歳）。

世界の五大陸の最高峰の全部の登頂、北極点の単独犬ぞり縦断、など登山家として、冒険家として、アニマル・ウエムラの異名をもつ「冒険野郎」植村直巳の業績は、人類史上前人未踏の偉業として輝いており、青少年のための学習用教材として広くとりいれられている。

身長一六二センチ、体重六二キロ、胸囲九六センチ、肺活量四九〇cc。

著書として次のものなどがある。

極北に駆ける（昭和四九年）文芸春秋。

青春を山に賭ける（昭和五十一年）毎日新聞社。

北極圏一万二千キロ（昭和五十一年）文芸春秋。

註 現住所

（東京都板橋区前野町三丁目九ノ一九）

二、戦没者名簿

(明治以降の各戦役別に一覧表を作成した)

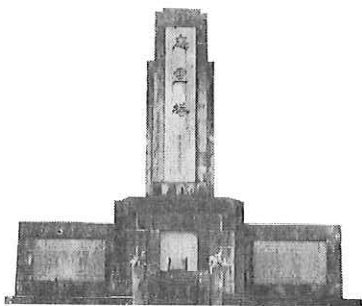
◀日高地区 平和塔 (東構に建立三六一柱)



▶清滝地区 忠魂碑
(清滝公民館入口に建立91柱)



▶三方地区 忠霊塔
(隆国寺境内に建立204柱)



二、戦没者名簿



▲西気地区 忠魂碑
(大円寺境内に建立)
(65柱)



▲国府地区 忠魂碑
(頼光寺境内に建立149柱)



▶八代地区 忠魂碑
(思惟神社境内に建立)
(78柱)

第六部 資料

明治以降各戦役地区別戦没者数

戦役(年次)	地区							計
	国府	八代	日高	三方	清滝	西気	計	
西南の役(明治一〇年)								
日清戦争(明治二七・二八年)	三	五	一	二			一	二
日露戦争(明治三七・三八年)	三	二	一〇	七			一	二五
第一次世界大戦・満洲事変・日中戦争 (大正三〇・昭和一六)	一八	一二	七二	三八	二〇	六	一	一六五
太平洋戦争(昭和一六・二〇年)	二二五	五九	二七八	一五六	六九	五八	七四五	七四五
計	一四九	七八	三六一	二〇四	九一	六五	九四八	九四八

西南の役

区	戦没者	生年月日	階級	戦没年月日	戦病死場所
鶴岡	宮村房吉	嘉永六・五	近衛兵卒	明治一〇・九・三	九州日向細見台
森山	岡田勝三郎	安政二・四	近衛兵卒	明治一〇・八・一二	九州

日清戦争

区	戦没者	生年月日	階級	戦没年月日	戦病死場所
上郷	杉原弥一	明治八・一一・一	陸一等卒	明治三〇・一・六	台湾嘉義戦病死
西芝	林伝蔵	明治元・五・二五	陸一等卒	明投二八・四・三〇	

二、戦没者名簿

日露戦争

区	戦没者	生年月日	階級	戦没年月日	戦病死場所
上郷	辻勝蔵	明治九年二月二四	陸伍長	明治三七年一月二	満州遼陽東南約二里ラウ ジャウツイ高地
堀	中野広蔵	明治一五年六月二九	陸二等卒	明治三七年七月三一	清国大平領附近
西芝	清水幾蔵	明治一二年四月二〇	陸輪卒	明治三八年八月二四	鳥取歩兵第四〇聯隊
猪爪	平野達蔵	明治一七年五月二五	陸二等卒	明治三八年八月二四	清国盛京省北部馬右保亡 舍宮病院
江原	松岡鱗三	明治一九年六月五	陸軍曹	明治三八年三月六	清国郡丹東方
岩中	松岡松太郎	明治一九年五月一九	陸一等卒	明治三八年三月三	満州遼陽
岩中	藤本幹造	明治一四年二月一	陸一等卒	明治三八年三月五	満州柳近屯
岩中	谷口伝蔵	明治一四年七月二九	陸上等兵	明治三七年九月三	満州遼陽南門
岩中	森垣光利	明治一四年七月一八	陸中尉	明治三八年三月六	奉天

竹貫	真狩富太郎	明治七年一〇・一七	陸一等卒	明治二八年六月二三	清国 基隆兵站病院
奈佐路	一幅繁蔵	明治元二年・八	陸一等卒	明治二八年一月一一	基隆兵站病院
〃	長谷川芳蔵	明治四年一二月六	陸一等卒	明治二九年一月二三	本籍地
〃	長谷川伊蔵	明治元三年・一七	陸一等卒	明治三一年五月八	
猪爪	石田順蔵	明治四年五月二二	陸上等兵	明治二八年四月一五	山東角沖
大岡	藤本助蔵	明治五年二月一	陸一等卒	明治二八年七月二八	台湾挑仔園
東構	寺坂安造	明治二年八月四	近衛兵一等卒	明治二八年八月二七	台湾征伐従軍上陸後行方 不明
伊府	上田虎吉	明治一九年二月九	陸一等卒	明治二七年六月一五	朝鮮海峡
知見	稲田市蔵	明治六年八月三一	陸一等卒	明治二八年七月二八	台湾新竹県偶谷

山田	石井	十戸	〃	觀音寺	〃	森山	知見	佐田	伊府	日吉	鶴岡	祢布	夏栗	赤崎	浅倉	
井上鉄之助	山根敬一郎	松下元蔵	国谷伊太郎	国谷太一郎	小林信蔵	谷垣良治郎	橋本与七	木下甚太郎	池田勝太郎	西村政太郎	藤本林三郎	中村藤蔵	谷口蔵雄	上野富之助	田尻浅太郎	
明治三・一〇・二三	明治一・四・六	明治一七・一・二三	明治三・一二・七	明治一・一二・一八	明治七・三・一二	明治一・九・二四	明治一五・四・一四	明治一・五・八	明治六・六・二	明治一五・四・一八	明治二・一・一〇	明治三・一〇・七	明治一五・二・一六	明治一五・二・二二	明治八・五・二五	
陸一等卒	陸一等卒	陸一等卒	陸輸卒	陸輸卒	陸輸卒	陸輸卒	陸輸卒	陸輸卒	陸軍曹	陸一等卒	陸中尉	陸伍長	陸上等兵	陸一等卒	陸上等兵	
明治三七・九・三	明治三七・一〇・一二	明治三七・七・六	明治三八・九・三〇	明治三七・六・一四	明治三七・六・一五	明治三七・六・一四	明治三八・九・二七	明治三七・六・一四	明治三七・九・三	明治三八・九・一〇	明治三九・六・二四	明治三八・九・二	明治三九・五・二一	明治三七・一〇・三	明治三八・三・三一	
満州遼陽城外	満州三塊石山	清国盛京省北部馬石堡		玄海灘	玄海灘	玄海灘常陸丸遭難	玄海灘常陸丸船上	玄海灘	玄海灘	輪送船上	満州鉄嶺兵站病院	東京第一野戦病院	清国黒溝台	清国吉林省南城子	満州遼陽	福陵第三師団第五野戦病院

二、戰没者名簿

第一次世界大戰以降滿州事變（大正三年～昭和二年）

區	戰没者	生年月日	階級	戰没年月日	所屬隊・戰病死場所
土居	木村弘之進	明治四〇・一二・一	陸上等兵	昭和五・二・一	中國南浮泉十二里口戰死
府市場	戸田実三	明治三一・六・一〇	陶一等卒	大正八・一二・二九	鳥取歩兵第四〇聯隊
藤井	赤坂健治郎	明治三一・一二・一二	陸二等卒	大正九・一・三〇	鳥取衛戍病院病死
八代	沼田政太郎	明治三二・八・五	陸二等卒	大正九・一・一五	鳥取衛戍病院病死
東構	長谷川幸之助	明治三九・九・一二	陸伍長	昭和五・七・二〇	在鄉死
浅倉	成田正司	明治四一・九・七	一等工長	昭和一〇・一〇・七	本籍地在鄉死
鶴岡	小河鉄治郎	明治二九・七・六	海一等機関兵曹	大正一一・八・二六	新高堪察加才セルナヤ河口公務死
久田谷	宮村元春	明治四二・一・二七	陸上等兵	昭和五・八・二六	朝鮮大邱衛戍病院戰病死
羽尻	道行富雄	明治四三・六・八	陸上等兵	昭和八・三・八	滿州国熱河省戰死
十戸	富山佐一	明治四五・七・七	陸上等兵	昭和九・九・三	鳥取衛戍病院戰病死
神鍋	松下鹿藏	明治四三・三・二六	陸上等兵	昭和七・七・二五	滿州ハルビン第一〇師團戰死
（太田）	藤本信行	明治四三・一二・六	海三等兵曹	昭和七・二・六	北緯二七度東經一二二度一〇分戰死
稻葉	奥田綱義	大正二・二・二五	陸上等兵	昭和一〇・八・二一	伏見陸軍病院戰病死
	中島純一	明治四三・一一・一	陸伍長	昭和九・三・一七	鳥取衛戍病院戰病死

第六部 資料

日中戦争以降（昭和十二年～昭和十六年）

区	戦没者	生年月日	階級	戦没年月日	所属隊・戦病死場所
松岡	吉田源一	明治四四・三・一	陸伍長	昭和二・九・二四	歩兵第四〇聯隊 中国河北 砲兵第一〇聯隊 中国河北
土居	宮本勝太郎	大正四・一・一〇	陸伍長	昭和三・一〇・一	省滄県一二里口南方戦死
〃	宮本利一	大正六・六・八	陸伍長	昭和四・八・二四	第八国第三部隊興安省 新巴爾虎左翼旗一〇高地 附近戦死
上郷	小山新	大正四・六・一	陸上等兵	昭和三・九・三〇	騎兵第一〇連隊 中国河南 省羅山県中閣店東二軒戦死
〃	森本林之助	大正五・四・三〇	陸上等兵	昭和二・一〇・二	歩兵第四〇聯隊 中国河北 省故家寨戦死
府市場	上村政夫	明治四二・四・二〇	陸伍長	昭和二・九・二四	中国河北省東花園戦死
〃	橋本慎吾	明治四一・一・八	陸伍長	昭和三・二・一七	歩兵第四〇聯隊 中华民国 山東省後陳戦死
〃	三木薫	大正四・一〇・一七	陸伍長	昭和三・二・二三	工兵第二〇聯隊 中国山西 省靈石県吳家頭側戦死
〃	三木伊和夫	明治四二・九・二八	陸中尉	昭和四・五・二〇	北省易県廂藍旗大龍若十 戰死
府中新	井上浜二郎	大正六・四・一六	陸伍長	昭和二・六・九・一六	患者輸送部 中国湖南省岳 陽景胡野溪戦死
野々庄	西村幸造	大正二・四・一	陸曹長	昭和二・六・一〇・一七	歩兵第一四〇聯隊 中国河 北省平郷県馬魯屯戦死
池上	林松一	大正二・一・二	陸伍長	昭和三・五・二一	歩兵第四〇聯隊 中国江蘇 省桃棧戦死
〃	長谷川辰造	大正六・三・八	陸上等兵	昭和五・一・三〇	歩兵第一四〇聯隊 中国湖 北省武昌一聯野戦病院戦 病死

二、戰沒者名簿

池上	西芝	上石	藤井	奈佐路	谷	〃	〃	〃	〃	中	八代	江原	〃	〃	〃	
岡本恒弥	上野保	池口茂市郎	長谷川重夫	橋本登	長谷川彰彦	柴垣数男	谷原要	篠部勇	吉田一男	篠部嘉久郎	今井秀雄	田中力	井上哲次郎	田里清一	友田俊太郎	福井寅二
大正七・四・一四	大正五・一・二七	大正二・九・二四	大正七・五・四	明治四三・一・一三	大正四・九・七	大正三・一・五	大正二・八・一〇	大正四・五・一四	大正七・四・一〇	大正八・三・一〇	明治四五・五・二五	大正四・三・二三	大正五・二・三一	大正二・一・二三	大正五・一〇・一二	大正三・四・一三
陸伍長	陸上等兵	陸上等兵	陸一等兵	陸曹	陸曹長	陸軍曹	陸上等兵	陸上等兵	陸上等兵	陸一等兵	陸上等兵	陸軍曹	陸上等兵	陸伍長	陸上等兵	陸伍長
昭和一六・三・二三	昭和二三・一・二三	昭和二三・二・一二	昭和五・六・一五	昭和二三・九・一〇	昭和二六・二・一九	昭和二三・四・二二	昭和二三・八・一〇	昭和二三・一・一九	昭和一六・一・二六	昭和一六・八・四	昭和一四・七・二四	昭和二三・四・二八	昭和一二・九・二四	昭和二三・四・二三	昭和二三・四・二六	昭和二三・五・一一
步兵第五〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇

第六部 資料

江原	森下政一郎	明治三六・八・一	陸上等兵	昭和二三・九・二三	歩兵第一四〇聯隊中国河南
〃	西達雄	大正二・五・一二	陸大尉	昭和二三・一一・一六	歩兵第四〇聯隊中国河南
〃	小谷完一	大正四・九・二四	陸伍長	昭和一四・八・二六	第八国境守五地区歩兵隊滿 翼旗戰死
〃	向井儀一	大正八・九・一六	陸一等兵	昭和一六・三・五	郷兵第一〇聯隊本籍地在 郷死
宵田	小田章信	明治四一・九・一六	陸上等兵	昭和二三・四・二四	歩兵第四〇聯隊中国江蘇 省東庄戰死
岩中	保木義雄	明治三九・二・一	陸伍長	昭和二三・四・二八	中国江蘇省辛庄戰死
〃	池内正一	大正二・五・二四	陸伍長	昭和二三・九・二二	中国河南省春塘打戰死
〃	大谷金吉	大正八・五・二五	陸上等兵	昭和一五・七・六	歩兵第八一聯隊中国江蘇 省吳江縣天亮浜南方附近 戰死
浅倉	吉垣正雄	明治四三・一〇・六	陸中尉	昭和二三・四・二四	歩兵第四〇聯隊中国江蘇 省卒庄戰死
〃	谷口信一	大正六・八・三一	陸上等兵	昭和二三・八・九	中国河南省戰死
〃	長尾武	大正五・一一・二五	陸上等兵	昭和一五・八・一	第一〇師團輜重兵第一〇 聯隊姫路陸軍病院戰病死
赤崎	吉谷茂	大正二・二・二六	陸伍長	昭和二三・四・二三	中国除州附近戰死
〃	辻井昇	大正四・二・六	陸上等兵	昭和二三・九・二四	歩兵第四〇聯隊中国河南 省春塘打劑合戰死
〃	辻井林一	大正三・一・四	陸伍長	昭和二三・一〇・一七	信陽附近戰死
〃	上野三郎	明治三八・一〇・二五	陸軍曹	昭和二三・一一・二六	野砲兵第一〇聯隊中国 河北省三勝口戰死
〃	吉谷昇一	明治四〇・四・一六	陸軍曹	昭和一一・五・三〇	歩兵第一四〇聯隊中国河 南省寧晋四芝蘭戰死
〃	辻井博	大正六・八・二	陸一等兵	昭和一六・八・九	歩兵第四〇聯隊兵庫療養 所戰病死

二、戦没者名簿

久田谷	道場										久斗	東構		
長岡熊治	国村一雄	前田岩吉	西岡薫	西岡孝	成田竹雄	安東誠一	新免厚	西岡弥市	喜多見浅夫	小野山巖	山田丈夫	新免政信	村尾勇	赤木勝己
明治四〇・五・二九	明治四四・七・二六	明治三八・六・二	明治四四・七・一	大正七・三・三一	明治四一・九・一五	明治四五・七・四	大正五・三・一〇	明治三六・三・一	明治四〇・六・五	明治四五・一・一六	明治四四・七・一〇	大正三・二・一一	大正二・一〇・一五	大正五・二・二三
陸伍長	陸伍長	陸伍長	陸伍長	陸上等兵	陸伍長	陸上等兵	陸上等兵	陸伍長	陸伍長	陸中尉	陸伍長	陸伍長	陸伍長	陸兵長
昭和二三・一〇・一六	昭和二三・四・二八	昭和二三・四・二四	昭和一二・一・一六	昭和一二・七・一八	昭和二三・一〇・六	昭和二三・一〇・四	昭和二三・一〇・一	昭和二三・九・一〇	昭和二三・四・二八	昭和二三・四・二八	昭和一二・一〇・三	昭和一二・九・二四	昭和一二・九・二一	昭和一二・四・一四
省柳林車站戦死	步兵第四〇聯隊中国河南	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇	步兵第四〇聯隊中国江蘇

第六部 資料

久田谷	前野喜代志	大正二・九・二四	陸上等兵	昭和四・一・九	野砲兵第一〇聯隊中國 河北省東鹿泉西劉家庄戰 死
坂本久二	大正七・三・二九	陸上等兵	昭和五・三・一七	鳥取陸軍病院戰病死	
前野時雄	大正五・一・一	陸上等兵	昭和六・二・二二	步兵第四〇聯隊本籍地戰 病死	
田中峯治	大正二・六・二八	陸伍長	昭和三・四・二四	中國江蘇省火石埠鍋山戰 死	
長谷 奎	大正三・七・二三	陸上等兵	昭和三・四・二八	步兵第四〇聯隊中國江蘇 省辛庄戰死	
國谷増太郎	明治四五・二・七	陸上等兵	昭和三・四・二八	步兵第四〇聯隊中國江蘇 省辛庄戰死	
井垣 正	大正二・一・二八	陸軍曹	昭和三・九・一七	步兵第四〇聯隊中國河北 省光州戰死	
木内佐一	大正五・九・一八	陸上等兵	昭和二・九・一一	中國河北省小五庄戰死	
太田和太郎	大正二・二・一六	陸伍長	昭和二・一・一一	中國山東省掖次県第四野 戰病院戰病死	
長谷川文次	大正三・三・二三	陸伍長	昭和三・四・二八	步兵第四〇聯隊中國江蘇 省東庄戰死	
今井良一	大正八・一・三	陸上等兵	昭和六・六・三	大阪療養所戰病死	
坂口宇太郎	大正二・七・二〇	陸上等兵	昭和六・一〇・八	步兵第四〇聯隊出石町戰 病死	
小田垣敏郎	大正五・二・一	陸伍長	昭和二・一・三	中國山東省清涼店戰死	
小林市左衛門	明治三九・三・九	陸伍長	昭和二三・一〇・二〇	中國河南省曲陽県	
藤井郁博	大正六・三・二〇	陸兵長	昭和五・一〇・二二	中部第四六部隊玄海灘輸 送船上戰死	
石橋清一	大正二・五・二六	陸軍曹	昭和二三・四・一八	步兵第四〇聯隊中國山東 省馬山戰死	
植村金重郎	大正三・六・九	陸上等兵	昭和二三・四・二八	步兵第四〇聯隊中國江蘇 省東庄戰死	
田中與一	大正六・四・六	海三等兵曹	昭和一五・六・二九	近公務死 第一八潜水隊潮岬灯台附	

二、戦没者名簿

伊府	篠垣	日吉	日置			日高						鶴岡	山本			
渡辺初明	藤原万造	河辺政治郎	安木幾太郎	松井武	赤木信一	細川政吉	嶋田助蔵	谷本梅太郎	川見勘一	北村武夫	戸田正躬	坂口一郎	河本祝一	河本信之	田中実	
大正六・二・三〇	大正元・一〇・二八	大正五・九・七	大正四・九・三	明治三八・三・一九	明治四四・一〇・二五	大正五・五・五	大正四・二・二九	明治四二・一二・九	大正九・一〇・二四	大正一・九・八	明治四三・一二・六	大正三・一二・一	大正六・九・一六	大正三・二・八	大正六・八・二一	
陸上等兵	陸伍長	陸上等兵	陸衛生伍長	陸伍長	陸上等兵	陸上等兵	陸伍長	陸伍長	陸上等兵	海二等兵曹	陸軍医少尉	陸伍長	陸上等兵	陸准尉	陸准尉	
昭和二三・一二・七	昭和二三・四・一九	昭和二三・一〇・三一	昭和二三・九・三〇	昭和二三・四・二四	昭和一一・五・三〇	昭和一一・六・二二	昭和一一・二・二二	昭和一一・八・一八	昭和一一・一・二三	昭和一一・六・五	昭和一一・四・五・二〇	昭和一一・三・九・二八	昭和一一・三・九・二四	昭和一一・三・五・四	昭和一一・二・二・五	
省九江五兵病戦病死	省鷲山戦死	歩兵第四〇聯隊中国山東	省陽新泉四〇聯隊中国湖北	省鳴風崗戦死	省兵第四〇聯隊中国湖北	省兵第四〇聯隊中国湖北	省兵第四〇聯隊中国湖北	省兵第四〇聯隊中国湖北	省兵第四〇聯隊中国湖北	省兵第四〇聯隊中国湖北	省兵第四〇聯隊中国湖北	省兵第四〇聯隊中国湖北	省兵第四〇聯隊中国湖北	省兵第四〇聯隊中国湖北	省兵第四〇聯隊中国湖北	省兵第四〇聯隊中国湖北

第六部 資料

觀音寺	森山					知見			佐田	佐田				
文垣信次郎	坂下 勇	斎藤 広市	岡田美之助	大谷 信藏	赤江喜代志	橋本 甚一	多田 虎雄	中川喜一郎	谷尾 常吉	小林市左衛門	小林 善一	村尾 八郎	田中 林一	新田 武志
大正 四・九・一二	明治 四四・三・一	大正 五・一・一七	大正 二・一〇・二	明治 三九・七・一八	大正 六・九・二八	大正 三・九・一〇	大正 二・三・一六	明治 四四・四・一一	明治 三五・一・二八	明治 三九・三・九	大正 六・八・一〇	明治 四四・三・一	明治 四一・四・五	大正 二・一・二六
陸軍 曹	陸軍 曹	陸一等兵	陸上等兵	陸 伍長	陸 軍曹	陸 伍長	陸 伍長	陸上等兵	陸上等兵	陸 伍長	陸上等兵	陸 軍曹	陸上等兵	陸上等兵
昭和 二・一・一三	昭和 二・九・二五	昭和 一五・一・五	昭和 一四・三・六	昭和 一三・四・二三	昭和 一五・一〇・二三	昭和 一三・三・二一	昭和 一三・二・一七	昭和 二・九・二三	昭和 二・二・二	昭和 一三・一〇・二〇	昭和 一三・九・一九	昭和 一三・九・九	昭和 一三・四・二八	昭和 一三・四・二七
步兵第四〇聯隊 中国山東 省清涼店戰死	中国河北省舞末河戰死	岡山療養所戰病死	省晉第一〇聯隊 中国河南 省嵩縣第三野戰病院戰 傷死	省五聖堂戰死	獨立步兵第一二大隊 中国 山西省武師泉大塘北方高 地戰死	戰傷死	省清寧一〇師四野戰病院 戰傷死	步兵第四〇聯隊 中国山東 省二〇里舖南部自果樹戰 死	步兵第四〇聯隊 中国河北 省人合省戰死	軍病院戰傷死	步兵第四〇聯隊 中国河南 省喜山谷戰死	中国河南省光利戰死	步兵第四〇聯隊 中国江蘇 省禹王山戰死	步兵第四〇聯隊 中国河蘇 省東庄戰病死

二、戦没者名簿

〃	芝	猪子垣	広井	〃	〃	〃	〃	羽尻	〃	〃	殿	栗山	〃	観音寺			
谷岡正一	山根貞一	中山藤吉	丸谷善一	川瀬重男	百合川寛一	福田政一	中川政応	谷垣豊吉	赤樫為治	赤樫菊治	成田武	竹村鉄之助	国谷勲	清水光太郎			
大正六・二・一九	大正四・一・二三	大正四・一・一〇	大正七・一・二八	明治四一・一〇・一八	大正六・六・二〇	明治四〇・八・一五	大正九・一・二一	大正元・一・一五	明治四二・六・二四	大正二・七・二〇	大正二・五・二六	大正二・二・一六	大正七・二・一	大正四・九・一三			
陸上等兵	陸上等兵	陸上等兵	陸上等兵	陸上等兵	陸上等兵	陸上等兵	陸上等兵	陸上等兵	陸上等兵	陸上等兵	陸伍長	陸軍曹	陸上等兵	陸上等兵			
昭和一四・一・二二	昭和二三・九・二四	昭和一五・七・一二	昭和一四・六・四	昭和一六・四・二三	昭和一五・一・二三	昭和二三・一〇・五	昭和二三・五・四	昭和二三・四・二四	昭和二三・八・一四	昭和二三・四・二八	昭和二三・四・一九	昭和二三・四・二六	昭和一五・六・二二	昭和二三・一〇・二九			
歩兵第四〇聯隊鳥取陸軍病院戦病死	歩兵第四〇聯隊中国河南省荊台戦死	歩兵第一七〇聯隊中国河北省北吳県自店戦死	歩兵第五三聯隊中国江蘇省武進県張家村戦死	病院戦病死	歩兵第四〇聯隊中国安徽省廬州第一〇師第二野戦	歩兵第一四〇聯隊中国河北省河西県戦死	歩兵第四〇聯隊中国河南省欄杆鋪張家湾戦死	歩兵第四〇聯隊中国江蘇省揚州戦死	中国江蘇省火石阜戦死	病院戦病死	歩兵第四〇聯隊中国江蘇省東庄戦死	歩兵第四〇聯隊中国山東省鷺山戦死	高地戦死	歩兵第四〇聯隊中国江蘇省火石阜台兒莊鍋山七三	歩兵第一四〇聯隊中国河北省威県戦死	歩兵第四〇聯隊中国河北省唐山附近戦死	歩兵第四〇聯隊中国河北省唐山附近戦死

第六部 資料

野	庄境	十戸	頃垣	石井	山宮	〃	〃	〃	栃本	神鍋(太田)	名色	〃		
成田甫	和田定雄	安積悦藏	宮垣信藏	和田猛	吉田定吉	竹中正	草間一郎	小田垣健一	北村勝	山崎健一	和多田正則	岡森利一	糸乘巖	
大正六・三・二六	明治四三・一一・六	明治四一・七・一二	明治四一・一一・二四	大正八・二・一二	大正三・一・二五	明治四〇・八・一八	明治四三・九・八	大正二・六・一三	大正四・一〇・九	大正七・六・二八	大正三・九・一	大正五・三・七	明治四五・七・一	
陸伍長	陸伍長	陸上等兵	陸上等兵	陸上等兵	陸上等兵	陸上等兵	陸伍長	陸上等兵	陸上等兵	陸上等兵	陸伍長	陸上等兵	陸軍曹	
昭和二六・五・一〇	昭和一二・九・二四	昭和二三・四・二八	昭和二三・四・二一	昭和二六・一〇・三一	昭和一二・一一・一二	昭和二三・四・二三	昭和二三・五・二一	昭和四・六・二	昭和一二・一〇・四	昭和一二・一〇・一	昭和一二・九・二〇	昭和一二・九・一〇	昭和一二・九・二〇	
歩兵第一四〇聯隊中国河北	北省鉅鹿縣前屯里戰死	省東花園戰死	東庄戰死	省馬莊戰死	省興濟鎮一〇師三野戰病院戰死	院戰死	院戰死	野砲兵第一〇聯隊中国河北省北京陸軍病院戰死	死	省撫州戰死	省武進縣陳村戰死	省清河縣小田莊戰死	省流河鎮戰死	省東花園戰死

二、戦没者名簿

太平洋戦争以降（昭和一六年～）

区	戦没者	生年月日	階級	戦没年月日	所屬隊・戦病死場所
松岡	坂本武	明治四四・三・二五	陸兵長	昭和一九・九・二〇	独立第二四一連隊中国湖南省衡北第一二八兵站病院戦病死
〃	竹中善秀	大正九・一〇・二四	陸伍長	昭和二〇・一・一二	歩兵第二二聯隊濠北モロタイ島トフ川戦死
〃	坂本一夫	大正一〇・四・二五	陸伍長	昭和二〇・三・六	第二一飛行大隊ニューギニア島トウナンブ戦病死

名色	岡村計一	明治四四・一一・二三	陸伍長	昭和二二・一〇・五	歩兵第四〇聯隊中国河北省黄河崖戦死
〃	尾上嶋太郎	明治四一・八・二四	陸伍長 <td>昭和二三・四・二四 <td>歩兵第四〇聯隊中国山東省三野戦死 </td></td>	昭和二三・四・二四 <td>歩兵第四〇聯隊中国山東省三野戦死 </td>	歩兵第四〇聯隊中国山東省三野戦死
〃	中筋元三	大正五・七・二	陸上等兵 <td>昭和二三・九・二八 <td>歩兵第四〇聯隊中国河南省羅山南方戦死 </td></td>	昭和二三・九・二八 <td>歩兵第四〇聯隊中国河南省羅山南方戦死 </td>	歩兵第四〇聯隊中国河南省羅山南方戦死
〃	山崎英逸	大正六・九・二九	陸上等兵 <td>昭和二三・一一・二三 <td>輜重兵第一〇聯隊一七防小港路戦死 </td></td>	昭和二三・一一・二三 <td>輜重兵第一〇聯隊一七防小港路戦死 </td>	輜重兵第一〇聯隊一七防小港路戦死
〃	山崎茂盛	大正五・一・九	陸軍曹 <td>昭和二五・一一・二一 <td>歩兵第一二一聯隊姫路陸軍病院戦病死 </td></td>	昭和二五・一一・二一 <td>歩兵第一二一聯隊姫路陸軍病院戦病死 </td>	歩兵第一二一聯隊姫路陸軍病院戦病死
〃	田中卯太郎	大正二・五・二	陸伍長 <td>昭和二三・九・三〇 <td>歩兵第四〇聯隊中国河南省鳴風崗戦死 </td></td>	昭和二三・九・三〇 <td>歩兵第四〇聯隊中国河南省鳴風崗戦死 </td>	歩兵第四〇聯隊中国河南省鳴風崗戦死
〃	井上保雄	明治四四・九・一六	陸曹長 <td>昭和二三・一〇・一</td> <td>省鳴風崗戦死 </td>	昭和二三・一〇・一	省鳴風崗戦死
〃	谷口博	大正九・四・一	陸一等兵 <td>昭和二六・三・一二</td> <td>鳥取陸軍病院戦病死 </td>	昭和二六・三・一二	鳥取陸軍病院戦病死
〃	中島莊三	大正六・二・四	陸上等兵 <td>昭和二三・六・三〇</td> <td>独立歩兵第一二大隊中国山東省靈石県索州鎮戦死 </td>	昭和二三・六・三〇	独立歩兵第一二大隊中国山東省靈石県索州鎮戦死
〃	有島長四郎	大正七・一・八	陸上等兵 <td>昭和二六・三・二七</td> <td>歩兵第四〇聯隊大阪赤十字病院公務死 </td>	昭和二六・三・二七	歩兵第四〇聯隊大阪赤十字病院公務死

第六部 資料

上郷	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	土居	〃	〃	〃	松岡				
松原泰三	宮本三郎	水上清実	土井良一	小田垣美通	北岡熊夫	石田実男	伊藤久吉	米田清	坂本三郎	坂本梅太郎	竹中菊太郎	竹中太一				
大正二四・九・一五	大正八・三・六	大正二一・一・二八	大正四・一〇・五	大正二〇・一・九	大正八・七・二二	大正六・一一・二五	大正八・一・九	大正二〇・一二・四	大正六・八・二二	大正二・六・九	大正五・一・一三	大正七・三・二一				
海水兵長	軍属C船員	陸伍長	陸曹長	陸衛生伍長	陸伍長	陸兵長	陸軍曹	陸軍属	陸伍長	陸伍長	陸伍長	陸伍長				
昭和一八・一・一〇	昭和二〇・八・一一	昭和二〇・六・七	昭和二〇・五・一八	昭和二〇・五・二	昭和二〇・三・一九	昭和二〇・三・一七	昭和二〇・一・二〇	昭和一九・九・三〇	昭和二〇・八・六	昭和二〇・七・二七	昭和二〇・七・二〇	昭和二〇・六・七				
群島附近戦死	第一六号駆逐隊ソロモン	第二日進丸台湾鼻信号所	ウマヤン川附近戦死	第四七聯隊ミンダナオ島	飛行第五二戦隊ルソン島	北部分隊ミンドナオ島	飛脚部七聯隊ミンダナオ島	沖沈没戦死	第一六号駆逐隊ソロモン	票兵第一一聯隊ビルマ	トンダウエジ東南方シ	ツタン河戦死	票兵第一一聯隊ビルマ	振武集団野口兵团ルソン	島マニラ東方御光山戦病	死

二、戦没者名簿

上郷	細田政男	小山治郎一	小山勝重	松原慶二	植村隆夫	小山為一	上杉敏太郎	小山茂	赤木歳造	赤木国憲	辻春雄	奥仲俊幸	辻岩夫	小山清太
大正五・九・二一	大正二〇・一・一八	大正六・五・二八	大正九・二・二八	大正二一・四・二〇	大正三・一・一四	大正三・一・二三	大正三・二・二二	明治四五・一・二〇	明治二二・二・一一	大正一五・二・四	大正六・四・八	大正一・三・九	大正三・五・一	
陸伍長	陸伍長	海上等機関兵曹	陸兵長	陸上等兵	陸伍長	陸兵長	陸伍長	海上等水兵	軍属(文官)	空二飛兵曹	陸上等兵	陸兵長	陸兵長	
昭和二八・一・一六	昭和二八・一〇・二一	昭和一九・九・一二	昭和一九・一〇・二	昭和一九・一・二六	昭和一九・二・三一	昭和一九・二・三一	昭和二〇・一・一七	昭和二〇・三・一九	昭和二〇・四・一	昭和二〇・四・二四	昭和二〇・五・二九	昭和二〇・七・二四	昭和二〇・八・八	
独立速射第六大隊ガダルカナル島カミンボ七六兵病戦死	方東支那海戦死	呉海兵団敷波南支那海方面戦死	第八一部隊ブーゲンビル島ミドリ川方面戦病死	海上機第二旅団第二大隊西部ニューギニアサラワテ島戦病死	独立歩兵第三四六大隊ペリリュー島戦死	独立歩兵第三四六大隊ペリリュー島戦死	工兵第一〇建設隊有島傷病軍人兵庫療養所公務死	呉海兵団東支那海戦死	岡山第一六一五部隊ア号建設隊阿波丸便乗東支那海上戦死	第七六一航空隊ルソン島クラーク地区戦死	独立歩兵三六八大隊北ボルネオコヤ州戦病死	独立歩兵第二三六大隊中国江西省泰和県下辺団戦死	第一六〇師団噴進砲五四聯隊北朝鮮羅津東南方戦死	

第六部 資 料

上郷	山次武夫	山崎鉄夫	小山保	辻博	奥仲一允	戸田三郎	田結庄正美	長谷川貞市	菅村幸之	秋田忠之	橋本鎮雄	葛原恭一	藤原安二郎	西田清一	戸田重夫	戸田広一
明治四五・二・二一	大正一〇・一・二三	昭和五・一・二八	大正四・一〇・二八	大正六・九・九	大正一四・一・二	大正一・四・一	大正三・二・一〇	大正九・一・一	大正一〇・一一・一	大正一二・一・一九	明治四二・八・二三	大正四・一一・二一	明治三七・三・二四	大正八・九・三〇	大正六・九・一〇	
陸上等兵	空飛兵曹長	軍属	陸上等兵	陸軍曹	海水兵長	陸軍曹	海工作兵曹長	陸伍長	陸兵長	陸上等兵	陸軍曹	海兵曹長	陸中尉	海兵曹長	海兵曹長	陸軍曹
昭和二〇・一二・二一	昭和二一・四・四	昭和二一・六・二四	昭和二四・一〇・七	昭和二七・七・一三	昭和一八・二・八	昭和一九・三・一七	昭和一九・三・三〇	昭和一九・七・一一	昭和一九・七・一四	昭和一九・九・二〇	昭和一九・一一・二二	昭和一九・一一・二四	昭和一九・一一・二七	昭和一九・一二・一九	昭和二〇・一・三一	
独立歩兵九二大隊 中国湖南省黃閣峯戦死	築城海軍航空隊豊岡病院戦病死	第一二三師団司令部満州黒河省黒河戦死	船舶砲兵第一聯隊中千島羅処島西南方戦死	羅兵第三七聯隊補第二機関銃中隊本籍地公務死	呉海兵团本州南方海面戦死	歩兵第一六三聯隊中国河北省天津陸軍病院戦病死	呉海兵团南洋群島戦死	歩兵第五三聯隊ブーゲンビル島キャスホスト戦病死	独立歩兵第一六二大隊中国湖南省衡陽県戦死	独立歩兵第三五三大隊比島ミンダナオ海戦死	歩兵第一一九聯隊第二機ビルマピンウエ戦死	第一一一輸送船戦死	第四〇野戦隊東部ニューギニア島マルゾラブ戦死	第一航空隊司令部東支那方面戦死	歩兵第一五四聯隊ビルマキヤクピュル県ミエボン郡カンゴン村戦死	

第六部 資料

府中新	新田 謹一	長沢 孝夫	長沢 弘道	太田 努	村尾 光盛	太田 操	吉岡 正夫	長沢 賢吉	原田 繁男	堀 池口 弘	奥 基	吉田 三好	奥 弘司	戸田 頼	船津 勇
大正一・一〇・二五	大正九・七・五	明治四四・三・三一	昭和二・一〇・二二	大正九・一・一八	大正八・八・三〇	大正四・一・一	大正六・二・三	大正八・八・二七	大正九・九・八	大正一〇・九・三〇	大正八・一・二・五	大正四・一〇・五	昭和二・八・一七	大正二・三・一一	
陸 伍 長	陸軍医中尉	軍属(文官)	海水兵長	陸 伍 長	陸 伍 長	陸 伍 長	陸 中 尉	陸 伍 長	陸 伍 長	陸 伍 長	陸 上等兵	海二等主計兵曹	陸 伍 長	海二等兵曹	陸 兵 長
昭和一九・五・二二	昭和一九・八・二一	昭和二〇・四・一	昭和二〇・四・二一	昭和二〇・四・二六	昭和二〇・五・八	昭和二〇・六・二七	昭和二一・一一・一	昭和一九・七・三〇	昭和一九・七・一五	昭和一九・二・一九	昭和一九・一・二	昭和一九・五・二二	昭和一九・一〇・二五	昭和二〇・四・二九	
騎兵第二五聯隊中国河南	省宣陽県韓成戦死	第四九師団防給部仏領印度支那カミムラン沖戦死	南支那海戦死	南西方艦隊司令部ルソン島方面戦死	獨立混成第三八旅砲兵ブルゲンビル島ボロボロ戦死	南方軍第一通信隊ルソン島北部マウンテン州バオオパンベン戦死	臨機統一〇中ルソン島リザール州イボ戦死	建勳第五三中隊本籍地戦病死	第七師団野戦第一聯隊補本籍地公務死	歩兵第五三聯隊中国江蘇省南京第一陸病戦死	野砲兵第五四聯隊姫路陸軍病院戦病死	山彦丸本州南方海面戦死	第一三野戦飛行設営隊ニギニアヘナブ附近戦病死	戦艦鈴谷比島方面戦死	獨立重砲兵第四大隊ルソン島バタンカス州マコロド山北方地戦死

二、戦没者名簿

〃	〃	池上	〃	〃	〃	〃	〃	〃	野々庄	〃	〃	〃	堀													
長谷川春吉	三木治夫	岡本虎之輔	西村亀治	水嶋梅治	秋田信一	田中由次	中安直三	竹中清一	木下敏雄	奥昌治	鳥居孝三	船津正夫	鳥居太一													
大正元・九・六	大正一五・一・一三	大正二・九・二二	昭和二・一一・二五	大正三・三・二七	大正八・七・二一	明治四二・一・二六	明治三九・二・二四	明治四三・七・九	大正九・一〇・二五	大正二・一二・一八	昭和二・四・二	明治四一・一・二二	大正一一・七・八													
陸兵長	海水兵長	陸兵長	陸兵長	陸兵長	陸兵長	海上等水兵	陸上等兵	陸一等兵	陸兵長	陸上等兵	海上等整備兵	陸伍長	陸伍長													
昭和二〇・一・二三	昭和一九・一一・一四	昭和一八・一・二四	昭和二一・八・二〇	昭和二〇・七・二二	昭和二〇・五・二〇	昭和二〇・四・二四	昭和二〇・一・二〇	昭和一九・一〇・三一	昭和一九・八・一九	昭和二六・一一・二	昭和二二・八・二	昭和二一・三・二八	昭和二〇・五・三一													
第六中隊ビルマモンミット戦死	第一八師団歩兵第一一四戦死	第一四震洋隊東支那海戦地区戦死	ガダルカナリ島勇川中間	天省蓋平衛戦病死	満州第七七五部隊中国奉天	ルネオラマク戦病死	独立歩兵第三六八大隊ポ	ルネオサンダカン戦病死	独立歩兵第三六八大隊ポ	ラーク地区戦死	北菲島航空隊ルソン島ク	西部ニューギニアソロモ	京東第一〇四師団中国南	広東第一陸軍病院戦病死	ソンド西北海上戦死	第一八航空基地司令部ル	江市国立病院公務死	歩兵第四〇聯隊島根県松	兵死	呉海兵団舞鶴海軍病院戦	一収容所戦病死	ナアゼル地区テチュウヘマ	岸州鉄神孤サマンナイマ	第一五一警備大隊ソ連沿	中戦死	第四航空特別通信ミング

第六部 資料

〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	西 芝	〃	〃	〃	池 上
三 木 賢	中 野 正	原 田 数 夫	原 田 良 雄	林 吉 郎	上 倉 富 喜 夫	三 木 登 美 夫	土 方 喜 一	林 治	林 五 六	上 崎 一 雄	小 林 工	上 坂 徹 治	浜 口 武
大正 二・ 二・一 四	大正 四・ 二・一	大正 六・ 九・二 一	大正 四・ 一・一	明治 四五・ 四・一 七	大正 七・ 二・二 七	大正 九・ 五・二 九	大正 三・ 一・九	大正 六・ 一・五	大正 六・ 六・二 八	大正 一〇・ 六・三	大正 三・ 五・二 九	大正 一三・ 一・六	大正 八・ 四・一
陸 上 等 兵	陸 伍 長	陸 伍 長	陸 準 軍 属	陸 上 等 兵	陸 伍 長	陸 中 尉	陸 一 等 兵	陸 一 等 兵	陸 上 等 兵	海 二 等 兵 曹	陸 曹 長	海 二 等 兵 曹	陸 曹 長
昭和 二〇・ 八・二 二	昭和 二〇・ 五・二 八	昭和 二〇・ 五・二 二	昭和 二〇・ 五・一 一	昭和 一九・ 一・一 三	昭和 一九・ 一・〇 七	昭和 一九・ 七・二 〇	昭和 一九・ 二・一 四	昭和 一七・ 二・三	昭和 一七・ 二・三	昭和 二〇・ 八・二 九	昭和 二〇・ 八・七	昭和 二〇・ 五・二 〇	昭和 二〇・ 三・一 六

中国浙江省方面戦死
 伊東戦車隊レイテ島ガン
 キボツト山附近戦死
 独立歩兵第三五三大隊ミ
 ンダナオ島ダハオシ州ロ
 ンヤン戦死
 日向渋谷分隊ブルーゲンピ
 島フブイノ戦死
 歩兵第一二一聯隊鳥取陸
 軍病院戦病死
 歩兵第三七聯隊補豊岡病
 院在郷死
 中国江蘇省上海第二陸病
 院在郷死
 戦病死
 独立歩兵第六五大隊中国
 湖南省衡陽南門外一籽附
 近戦死
 歩兵第二二二聯隊西部ニ
 ユーギニアビアク島マン
 ドキン戦死
 野砲兵第一四聯隊ニュー
 ギニアウエック戦死
 川西航空機(株)神戸市東
 灘区本庄町殉死
 第二二一聯隊モロタイ島
 チウ河支流戦死
 騎兵第一〇聯隊補有馬軍
 人療養所在郷死
 中央航空路部台湾航空路
 管区台南州嘉義飛行場戦
 死

二、戦没者名簿

上石	〃	〃	〃	〃	〃	竹貫	〃	〃	〃	〃	〃	〃													
小林 証夫	植 坂 篤	上 坂 徹治	小 坂 和 一	吉 田 富 夫	上 坂 明	大 植 平 八 郎	秋 岡 榮 造	小 西 四 男 司	山 田 登	郵 生 甚 作	小 西 利 夫	植 村 幸 太 郎	小 西 諫												
大正 九・二・二五	大正 七・九・二七	大正 一三・一・六	昭和 二・六・一二	大正 六・四・二六	大正 五・三・四	大正 一三・九・五	大正 四・五・二〇	大正 一・一・一	明治 四三・六・二	大正 九・六・二九	大正 一・一・三	大正 七・三・七	大正 九・九・一三												
陸 兵 長	陸 上 等 兵	海 二 等 兵 曹	海 二 等 兵 曹	陸 伍 長	陸 上 等 兵	陸 軍 曹	陸 伍 長	海 二 等 機 関 兵	陸 軍 医 中 尉	陸 上 等 兵	陸 伍 長	陸 曹 長	陸 伍 長												
昭和 一八・七・二二	昭和 二〇・二・八	昭和 二〇・五・二〇	昭和 二〇・七・一八	昭和 二〇・七・二七	昭和 二一・三・四	昭和 二三・五・一	昭和 一七・一〇・七	昭和 一九・二・四	昭和 一九・八・一〇	昭和 一九・八・一九	昭和 一九・九・二〇	昭和 二〇・三・二〇	昭和 二〇・一・五												
南海第四守備隊南海浦1	ゲンビルソロモン沖附近	戦死	独立野戦第二聯隊中国湖	病死	南省零戦第一三二兵病戦	レイテ島戦死	施設一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇	歩兵第三八四聯隊ソ連領	シベリヤイルク1ツクマ	リタ収容所戦病死	省綏芬河西三聯隊牡丹江	戦病死	島省延吉陸病戦病院	呉海兵団横須賀陸軍病院	歩兵第一八聯隊ブ1ゲン	ビル島チゴ戦病死	独立砲兵第一九大隊バシ	海峽戦死	第一五軍野兵廠ビルマモ	ライク県カレワ郡セエジ	フイリツピン沖で輸送船	沈没による戦死	第二南方遺艦死	漢江丸乗艦死	ラバヤ沖戦死

第六部 資料

〃	奈佐路	〃	〃	〃	〃	〃	〃	藤井	〃	〃	〃	〃	〃	竹貫
一幡小和市	長谷川新一	長谷川臯朔	石田隆	石田長治	藤本念	藤本敬一	石田市郎	藤本達一	山田巖	秋岡清志	米田勲	小西五六	田原岩藏	真狩幸造
明治四五・六・六	大正六・四・三〇	大正一四・五・一	大正一三・九・一三	大正六・一・一四	大正八・一〇・四	明治三八・五・三〇	大正六・一・二五	大正五・三・二九	明治三九・五・七	明治四二・五・一五	大正一〇・一・一四	大正一四・二・一	明治四四・一・二七	大正一三・四・二〇
陸上等兵	陸一等兵	陸伍長	陸上等兵	陸上等兵	陸伍長	海軍軍属	陸伍長	陸伍長	陸軍医中尉	陸伍長	陸兵長	海二等飛行兵	陸曹長	海水兵長
昭和一九・七・二九	昭和二七・一・一〇	昭和二〇・一二・七	昭和二〇・七・六	昭和二〇・六・一六	昭和二〇・五・二六	昭和二〇・五・一一	昭和二〇・四・三	昭和一九・七・一四	昭和二〇・一二・二一	昭和二〇・四・一九	昭和二〇・三・二一	昭和二〇・一・一八	昭和二〇・一・一六	

陸航輸送部第二飛行隊比
 島ソゲガラオ上空戦死
 第三二特別根拠地隊比島
 方面戦病死
 呉空軍隊呉空南方海面公
 務死
 歩兵第六三聯隊ルソン島
 又エバピヌスカヤ州パレテ
 戦死
 第一五一警備大隊中国延
 吉龍井病院戦病死
 歩兵第一四聯隊ビルマ
 ミツナチ県ミツチナ戦死
 振集野口兵団ルソン島マ
 ニラ東方ボソボソ島
 川西航空機(機)武庫郡本
 庄村青木殉死
 海挺基第二六大隊沖繩本
 島首里戦死
 島首里戦死
 戦兵第六六聯隊補本籍地
 戦病死
 第一六〇師団歩兵第四六
 三聯隊朝鮮全羅北道那山
 陸病戦病死
 陸立歩兵第一一〇大隊ソ
 連シユミヨノフカ地区タ
 ダバハザ収容所戦病死根
 歩兵第一二一聯隊島根県
 養所戦病死
 八東郡乃木村傷疾軍人療
 山砲隊第七聯隊中国河西
 省涿州唐舖戦死

二、戦没者名簿

〃	中	〃	〃	谷	〃	〃	〃	〃	〃	奈佐路	〃	〃	〃	〃	
吉田登	吉田一実	篠部克己	小林隆	吉田治郎	滝下敏夫	小林平太郎	一幡孝	橋本寿雄	長谷川明	一幡貴一	橋本秀二郎	山崎巖	長谷川茂男	橋本隆吉	
明治四四・一二・二四	大正一〇・五・二	大正二・一・二七	大正六・一・一	大正五・一一・一〇	大正一〇・一一・三〇	明治二六・九・一九	大正九・三・一	大正二・三・三一	大正一一・六・八	大正一一・四・一	大正八・六・一〇	大正二・二〇・一四	大正一一・三・二一	明治四五・四・一	
海上等水兵	海上等水兵	海大尉	陸伍長	陸兵長	陸軍曹	陸中佐	陸伍長	陸兵長	陸伍長	海一等兵曹	陸伍長	陸伍長	陸伍長	陸上等兵	
昭和二〇・三・一四	昭和一九・一・三一	昭和二〇・五・二八	昭和二〇・五・二二	昭和一九・九・一〇	昭和二〇・八・一九	昭和二〇・八・一〇	昭和二〇・六・六	昭和二〇・五・二八	昭和二〇・五・二〇	昭和二〇・五・二〇	昭和二〇・三・二〇	昭和一九・一〇・一四	昭和一九・九・二	昭和一九・八・八	
第三一港務ルソソ島エヌ 州戦病死	第三一港務ルソソ島エヌ 州戦病死	第八警備隊南洋群島方面戦死	神風特別攻撃隊水部隊 南西諸島方面戦死	第五四師団第一野戦病院 ブルマビエ1東南戦死	歩兵第一四〇聯隊広島陸 軍病院戦傷死	歩兵三六七聯隊満州三江 省富錦県三道崗戦死	獨立速射砲第一八大隊ル ソソ島イサベラ州パラナ ン戦病死	島真壁戦死	獨立砲兵第九中隊沖繩本 島真壁戦死	第一〇二師団野戦病院ル ソソ島リザール州イボ戦 死	野砲兵第一〇聯隊ルソソ 島バレット峠戦死	キボット山附近戦病死 伊東戦車隊レイテ島ガ ン	集成歩兵第一福井大隊ル ソソ島マニラ附近戦死	野砲兵第一四聯隊ニュー ギニアウエック戦死	ギニアウエック戦死